

Letters

Arpak

レターズアルパック

VOL.244

ISSN 2432-5295

環

C O N T E N T S

- ◆【環】…01～04
- ◆今、こんな仕事をしています…05～08
- ◆近況&イベントのお知らせ…09～10
- ◆まちかど…裏表紙

環

「環」という字には「まわる」や「めぐる」という意味があります。端点がなくつながっているので始まりもなければ終わりもない。

普段の私たちの暮らしの中にはいたるところに「環」が満ちています。明けない夜はないし、季節はめぐってくる。年度が終われば切れ目なく始まる。輪廻転生という哲学もあります。自転と公転を続ける地球にいる限り宿命づけられたことであるともいえるのかもしれませんが。

一方で、巷間でよく聞く言葉は「環境」でしょう。私たちの業務の中でもよく使う言葉です。文字の意味を考えると「まわりとのさかい」ということ。あるものをとりまく「場」や「空間」に触れる部分と考えると理解しやすいでしょうか。私たちがとりまく「環境」への感度を高めないとはいけません。

めぐりめぐる日々の中で、次にめぐってきた時には新しい自分を見つけれられるよう、研鑽したいものです。

レターズアルパック編集委員会

“環”日本海文化圏

三輪泰司：
名誉会長



環日本海・東アジア諸国図

北陸の県では、このような地図を見かけます。「環日本海・東アジア諸国図」といいます。

井上満郎・京都市歴史資料館長の近著『渡り来る人びとー日本・京都の深層を知る』のカバーにも使われています。

ヤクートの村で

この図で、日本列島と同じくらいの距離を、真直ぐ下の方へ行くと、シベリアのバイカル湖に行き着きます。60年前、イルクーツクからバイカル湖沿いに200キロほど行きました。村のおばあちゃんとカタコトのロシア語で話をし、イエを見せてもらいました。

板葺き、平入り

へいは、板を地べたに差し込んだだけ。塗装していません。白木・シラキと言います。イエ



右から2人目・三輪(32歳・1963年7月15日)の屋根は板葺きで、平入り。トイはありません。よく見ると「千木・チギ」のようなものがあります。た。

京都・宮津市の元伊勢籠神社は、神明造・檜皮葺き平入りで、白木造りです。

日本人の成り立ちと文化継承

埴原和郎・元国際高等研究所副所長の人類学の「二重構造モデル」が知られていますが、古代DNAのゲノム解析によって深化しています。日本列島へ環太平洋と環日本海、即ち南から北から人がきて多様な文化を育てたのです。

まだ良くわからないおおよそ14000年間の縄文時代と庶民住居のカタチの継承を調べてみたいですね。



元伊勢籠神社

復興支援とプラットフォーム

堀口浩司：
シニアフェロー

今年の元旦に発災した能登半島地震では、多くの方がお亡くなりになり、まだ多くの方が避難生活を余儀なくされていると聞いています。被災地域の皆様には心よりお悔やみ申し上げます。

直下型地震により木造住宅が倒壊し多くの犠牲者がでた阪神・淡路大震災との類似点も指摘されますが、今般の被災地は半島部にあつて高齢化や過疎化が顕著であり、人口減少化の日本における今後の災害復興の課題に直面しています。

発災後29年を経て阪神・淡路大震災の復興過程を振り返って見れば、人口密集地域ゆえに被害は甚大でしたが、その過程には幾つかの問題点を含みつつも、恵まれた条件のもとで「創造的復興」を実現したと言えます。阪神・淡路大震災は「ボランティア元年」と表現されるように、我が国に災害ボランティア活動が生まれ、個人や企業の利害を超えた様々な支援活動が生まれました。

アルパックも兵庫県や神戸市など自治体の調査や復興計画、被災マンションの建て替え支援や被災者への相談活動など、組織あるいは個人としても多様な

関わりを経験しています。

復興計画や復興事業には大小のコンサルタント会社や設計事務所、大手ゼネコンの計画チームが参加し、それぞれの会社の垣根を超えた共同作業が行われました。地震発生に遡りますが、

1991年に日本都市計画学会関西支部が発足し、京阪神の大学、産官学の参加、土木建築造園の専門家による諸活動が行われました。また同じ年に都市環境デザイン会議が発足し関西ブロックでは実務者と実践的研究者を中心とした熱心な活動がありました。このような活動を通じて組織を超えた個人的なネットワークが醸成されていたというのも恵まれた条件だと思えます。さらに個人的な信頼関係を基本としつつも、時にはノンプロフィットな「学会」「Jinji」として立場を使い分けて活動していました。このようなプラットフォームとなる組織を維持していくことが、それぞれの地域の資源となつていくと思います。石川県を含む北陸地域には都市環境デザイン会議北陸ブロックや学会活動を通じて、その人的な環（わ）が今後の復旧復興活動に効果を発揮すると期待しています。

日常に広がる「環」

石橋昂大：
建築プランニング・デザイングループ

「環」という言葉は、私たちに様々なイメージを与えます。その中でも、結びつきや繋がりを連想する方も多いのではないのでしょうか。今回はそんな「環」について最近感じたことを紹介します。

さて、まず、皆さんは「世間は広いようで狭い」と感じたことがどれだけあるでしょうか。私は最近、大学のラグビー部の友人の結婚式に参加したのですが、その友人の奥さんは私の大学の建築学科の後輩でした。一見、どこにでもあるような話ですが、そもそも二人は大学キャンパスが別で、大学時代に接点はなく、社会人になつて偶然出会い、意気投合し、結婚したのです。そのため私にとつては、「世間は広いようで狭い」と感じた瞬間でした。他にも、引越しの物件探しを担当してくれたさつた不動産会社の方と同郷でお互いに知り合いだったということもありました。このような出来事が1ヶ月間に立て続けに起こつたので、「私たちの日常には様々なつながりがあふれていて、それが思わぬところでつながるな」と驚きつつ、変な怖さもあつたものです(笑)。ただ、

これまでのつながりの環と新たなつながりの環が結びつくというのは私にとつては面白い瞬間でもありました。

また、つながりというのは「人と人」だけではなく、「人と場所」というものもあると思います。

私自身、福岡で青春時代を過ごしましたが、生まれは名古屋、大学時代も名古屋、また来年度からの仕事場も名古屋と名古屋と切つても切れないつながりがあります。そのためか、名古屋を訪れると不思議と落ち着きます。人にあるふるさと精神に近いものかもしれませんが、それほど「人と場所」のつながりは大事なものに感じます。これから業務でたくさん地域を訪れ、様々な視点から提案をしていくことになると思いますが、一つ重要な視点なのかなとも考えたりもします。

このように人や場所との結びつきが、私たちの日常を豊かにし、思いもよらない瞬間でつながりを感じさせてくれます。これからも、さまざまなつながりを大切にし、名古屋に異動しても新たな環を見つけていきたいと思えます。

区分所有建物の未来を 環になって語る

竹内和巳：
生活デザイングループ

「建物」の未来について、各区分所有者の思いだけでは色んなことが整理されていきません。そこで、今年度はアンケートの報告とあわせて、それぞれ思いや困りごとについてざっくりばらんに

「建物」の未来について、各区分所有者の思いだけでは色んなことが整理されていきません。そこで、今年度はアンケートの報告とあわせて、それぞれ思いや困りごとについてざっくりばらんに



車座になった意見交換の様子

京都府大山崎町には、京都府住宅供給公社が昭和40～50年にかけて整備した、円明寺ヶ丘団地があります。当該団地は分譲マンションとテラスハウスで構成されますが、今回は分譲マン

意見交換をする機会が2日間設けられ、計60名ほどの参加がありました。当日は皆さんと輪になって、将来意向（自身は高齢でお金を出すのが難しいから修繕が現実的、孫世代に渡すために将来は建替えも考えないといけないのでは・・・等々）から管理組合運営の困りごとまで、本当に色んなお話をいただきました。円明寺ヶ丘団地は計41棟あるのですが、管理組合は1～2棟にひとつで30以上の管理組合があります。今回は、管理組合間の情報共有の機会にもなり、よかったと思います。

区分所有建物の将来を考え、決めるには、非常に長い時間が必要になります。今回の機会がはじめの一歩になり、未来がつけられていくことを願います。



円明寺ヶ丘団地の風景

アパレルで環を考える

植松陽子：
サスティナビリティマネジメントグループ

世の中の価値観が、「モノの所有」からシェアリングやサブスクなど「モノの利用」に移行していると言われています。循環型経済を意味する「サーキュラーエコノミー」は、大量生産・大量消費・大量廃棄が前提のこれまでの経済システムに代わる考え方として注目を浴び、政策的な推進や企業のビジネスモデル等を背景に広がりを見せています。

サーキュラーエコノミーは、廃棄物が出ることを前提とした今までの3Rの枠組みを超えて、投入・消費する資源を抑えつつ、資源を有効活用し、新しい付加価値を生み出すという考え方です。商品等を高い価値の状態のまま流通・循環させ続けることも一つのポイントになります。こう書いてしまうと、手が届かない、とてつもない事のように感じてしまいます。そこで、少し目線を変えて。

数年前から音楽やファッションなどで80～90年代カルチャーのリバイバルが起きています。中高年世代には懐かしいけれど、チョイダサとも感じられるものが、若い世代には魅力的でカッコいいものとして受け入れられ、祖父母や親世代の洋服を譲りうけてオシャレに過ごしている若者も見かけます。80年代と現代を行き来するドラマも話題と



祖父のセーターを着こなす女子高生

アパレル業界のビジネスモデルは、ファストファッションに代表される大量生産・大量消費・大量廃棄だと言われています。原材料調達から製造段階までのCO₂は年間約9万トント（1着あたり約25・5キログラムCO₂）で、服の染色等にも大量の水（1着あたり約2300リットル）が必要になるなど、実は環境負荷がかなり大きい産業です。また、1年で供給される洋服のうち9割が1年で手放されているそうです。

30～40年前の洋服は、布地も縫製も良いものが多く、長く着られるものが多いでしょう。新たに買うのではなく、環らせる。現代の多様でジェンダーレスな価値観の中で、世代や性別なんて軽々と超えながら、祖父母や両親の洋服を当たり前受け継いでいく社会が目前に来ているのかもしれない。

人柄が生み出す小さな経済循環

竹中健起：

都市・地域プランニンググループ



立派な松が目を引く「栄盛湯」

私は日頃より行きつけの銭湯に行くのが好きです。単にお風呂やサウナを楽しむのはもちろんですが、綺麗に手入れされた敷地内のお庭からしみ出ている、番台に座るおかみさんの人柄につられて訪れている側面もあります。孤独に一人暮らしをする私にとっての、ある種の福祉施設です。

ふと周りを見てみると、このような単に店舗の持つ機能・サービスだけではなく、そこで営む店主の人柄が人を呼び寄せるコンテンツとなっているものがあるかと思えます。昔ながらの定食屋やスナック等はわかりやすい例でしょうか。商店街で婦人服店が根強く生き残っているのも、服よりも店主とのコミュニケーションを求めて人が訪れるからだと思最近聞き、なるほどと思いました。

店主の人柄が色濃くしみ出ているような店舗にはやはり一定層のファンがおり、多様な人が何度も通い集う文化的・社会的な場（居場所）として機能しつつ、小さな経済循環を生み出しているように思います。ある種、地域にとって大切な資源です。

一方で、自営業の持続性の難しさ（担い手不足、施設老朽化等）と、店主の職人気質な性格等が重なり、周りにはそのような姿が見せず、営業の継続が困難となった場合にパタリと店を閉まってしまうことを見かけます。私の地元にあった、優しい店主がつくる絶品のチキンカツを求めて地元民が集まる鶏肉屋もそうでした。皆さんの身の回りにもそのような現象はあるのではないのでしょうか。地域内で潜在的に、何気なく共有されていた価値が顕在化する瞬間です。自分にとって大切に、単なるそのものの金銭的な価値以上に、価値を感じる「環境」を守るために、見返りを求めずとも日常的に支援できる、あるいは関わりしるを生むような仕組みみたいなものも、あっても良いのかなあと思えます。

私にかかる色々な環

西村創：

都市再生・マネジメントグループ



団地の53年目での最後の感謝祭の様子

しをすることで、様々な立場でのライフプランの悩みをお聞きしますし、事業を進めていくために、社外の方々（デベロッパー、ゼネコン、設計事務所、弁護士、司法書士などなど）とも、ご一緒にお仕事をさせていただくことで、これまでにない経験をさせていただいています。昨日は、団地の53年目での最後の感謝祭で、いろいろな方から、団地の歴史のお話を聞かせていただきました。あとくわしいことはお話しできませんが、差し押さえや供託なんて手続きも経験しています。

年齢を重ね、同じようなサイクルで生活をしていると変化が少なくなり、1年があつという間に過ぎるということが多くなります。ここ数年、仕事もプライベートもこれまでにない動きをする中で、自分を取り巻く環が広がりがつつあり、この年になって1年1年が長くなつてるなと感じています。

仕事では、これまで計画づくりを行政の方々とさせていただくことが多かったのですが、近況でも書かせていただいたとおり少し変わって410戸の大規模団地の建替え事業のお手伝いをさせていただいております。410戸の権利者の方々とお話しをすることで、様々な立場でのライフプランの悩みをお聞きしますし、事業を進めていくために、社外の方々（デベロッパー、ゼネコン、設計事務所、弁護士、司法書士などなど）とも、ご一緒にお仕事をさせていただくことで、これまでにない経験をさせていただいています。昨日は、団地の53年目での最後の感謝祭で、いろいろな方から、団地の歴史のお話を聞かせていただきました。あとくわしいことはお話しできませんが、差し押さえや供託なんて手続きも経験しています。

プラッと貴生川 —地域のニーズとポテンシャルを可視化する プレイスメイキングによる社会実験—

辻寛太：

地域再生デザイングループ

甲賀忍者やタヌキの焼き物で知られる信楽焼、NHKの朝ドラ「スカilet」の舞台にもなった滋賀県甲賀市で、公民館の建替えに伴う交流拠点の施設計画を支援しています。

建替えの対象となる敷地は、3つの鉄道が乗り入れるまちの玄関口の目の前です。1日の駅利用者も多く、自宅・勤務先・通学先・お出かけ・観光地等、様々な発着点の動線上にあり、周辺には花火大会が行われる杣川や飯道山が位置するなど、利便性と自然空間を備えた一定のポテンシャルを有する場所です。他方で、駅利用は朝・夕に集中し、駅も通過拠点に留まっておろ、日中の賑わいや人々の滞在が乏しい空間となっていました。

交流拠点の具体的検討を進める前に、この場所に地域やエリアの利用者はどのような期待やニーズを持っているのかを、空間の可視化を通して検証するために、既存資源やポテンシャルを踏まえたプレイスメイキングによる2か月間の社会実験を企画しました。

企画の具体化や社会実験の運営は、地域住民や今回の取組に参加したい有志のメンバー中心に実施しました。それぞれの

チームでは、場をどのような設えとするのか、そこでどんなプログラムをするのか、そもそも自分たちは何をしたいのか、積極的な議論の下、まちづくりを自分事として捉え準備が進んでいきました。

夏の暑さが落ち着いた頃、完成した芝生広場では、オープニングイベントが開かれました。遊具で子供たちが遊ぶ中、チームリーダーと市長がまちへの想いを語る姿を、80人以上の観衆が聴く光景からは、この場所への期待感がうかがえました。

2か月間にわたる社会実験では、こどもダンス大会、夜カフェ、マーケット、バスケット大会など、様々なプログラムを実施しました。いずれも、地域の方を中心に多世代の方に楽しんでいただき、参加者からは、「楽しかった」、「またやってほしい」といった意見を受けました。また、運営メンバーからも「頑張ったよかった」、「この熱量を大切にしたい」といった声を聞くことができました。アルパックとしても、地域と二人三脚で取り組んだこの経験は大きな成果であり、やりがいにもなりました。今後、貴生川駅周辺がどのようなエリアになっていくのか、非常に楽しみです。

若狭町・熊川宿でウェルネスツーリズムを体験しませんか？

江藤慎介

地域産業イノベーショングループ

北陸新幹線の敦賀延伸で盛り上がる福井県嶺南地域。

その1つである若狭町・熊川宿では、古民家を活用したシェアオフィスや宿泊施設等が次々と生まれ、今春からは新たにキャンプ場「山座熊川」がグランドオープンしました。

6棟のキャンピングサイトと6箇所のキャンプサイトを有することから、今後の平日稼働を考えると、観光庁「歴史的資源を活用した観光まちづくり事業」を活用し、宿泊型の企業研修プログラムとして、「ウェルネス」や「チームビルディング」の視点を取り入れたプログラム開発に取り組みました。昨年7月〜11月にプログラムを検討し、12月にモニターツアーを開催・検証する内容で、特徴は3点あります。

1つめは、里山のアクティビティを知り尽くした和尚とともに楽しむ熊川トレイルや坐禅等のプログラムを取り入れたこと。2つめは、里山のアクティビティで心身が解放された状態で、自分や他者が大切にしている価値観を知り合うチームビルディング・プログラムを取り入れたこと。

3つめは、日常のストレス状態をウェアラブル端末で測定し、本プログラムを通じてストレスの発生要因や軽減要因を考える機会を取り入れたこと。代表企業である株式会社デキタを中心に、当社を含む4社がそれぞれの専門性を活かして関わることで、本プログラムが実現しました。

この他、熊川宿ならではの「食」等を取り入れたプログラムは、モニターツアーに参加された企業にも好評で、観光庁のコーチ陣からも高い評価を受けました。関西圏だけでなく、北陸新幹線で行きやすくなった首都圏の企業の皆さん、次回の企業研修は若狭・熊川宿で実施してみませんか？



キャンプ場「山座熊川」とモニターツアーの様子

道路空間のあり方を考える社会実験 「みちりノ」を実施しました

太田雅己：

生活デザイングループ

茨木市の中央通りで、昨年11月に道路空間活用社会実験を実施しました。

これまででもメインストリート
の魅力を高める取組として、令和2年度に基礎調査の実施、令和3年度にワークショップ、令和4年度に社会実験を実施し、レターズアルパックでも紹介してきました。

昨年度社会実験では、多くの人にとって趣旨が伝わりにくい、わかりにくかったという反省がありました。この反省を踏まえ、今年度はエリアを狭めて車両の通行止めをしながら、2日間だけですが大胆に道路空間を変えて社会実験を実施しました。

場所はJR茨木駅前商店街。少し寂れてきた雰囲気もある商店街で、活性化にもつながるこ



チラシ



普段の道路空間の様子

とを目指し、沿道店舗の店主さん達に声をかけながら企画を検討していきました。

しかし当然ながら店主のみならずさんが忙しく、最初から好意的に受け止めるというよりも、むしろ批判的な意見も多かったです。粘り強く通うことで徐々に打ち解けていき、最初は批判的な目線でいろんな意見をいただいた若干コワモテの店主さんが、「ええやん、やろう」と乗り気になった時は、心をつかめた気がしてうれしい気持ちになりました。そうして2日間の社会実験はいろんな人の笑顔が見え、反省もありながらいい取組として終わりました。ステークホルダーの機運を高めて

まちを動かしていくために、やはり現場に出て考えることが重要だと改めて思いました。

社会実験の結果はすぐには整備等にはつながりませんが、今回できた関係者とのつながりを維持しながら次の取組につなげていきたいと思います。

社会実験の結果はすぐには整備等にはつながりませんが、今回できた関係者とのつながりを維持しながら次の取組につなげていきたいと思います。



社会実験中の様子（昼）
歩道と連続した滞在空間を設えました

線引き都市から非線引き都市へ ～土地利用制度の見直し～

橋本晋輔：

ソーシャル・イノベティブデザイングループ

松江市は令和5年2月に、線引き制度（市街化区域と市街化調整区域による区分）による土地利用コントロールから「線引きを用いない土地利用コントロール」に移行していくことを表明しました。

人口20万人を超える都市が、線引きを廃止するのは全国的に見ても珍しい選択です。背景には、調整区域にある集落地の深刻な人口減少などがあります。これまでも調整区域では、開発許可制度を活用し、一定の開発を認めてきましたが、元々定めている用途の建築物以外を新たに建築できるかは時間をかけた審査が必要で、新たな建築ができるかできないかは不透明な状況でした。市内のバランスのとれた発展に向けて、調整区域にある集落地のようなどころでも、新たな「チャレンジ」ができるということを知ってもら

う、発想を転換してもらうために、新たな建築が「基本的にはできない」から「基本的にはできる」形にするため制度を見直すこととなりました。

線引き制度は、新たな開発圧力に対して、市域を文字通り線で区切り、市街地の規模をコントロールする制度です。開発圧力の強い時代には、線で区切り規制をすることが有効ですが、人口減少が進み開発圧力が低くなるこれからの時代は、単純に規制するだけでなく、小さなニーズを拾い上げ、うまく誘導する、柔軟な土地利用コントロールが必要で、もちろん、宍道湖や中海周辺に広がる良好な農地や緑豊かな山地、歴史ある神社など、調整区域には松江の魅力を作る様々な資源があり、それらを守ることも必要です。

現在、新たな土地利用制度として、用途地域や用途白地における特定用途制限地域などによる「ベースの土地利用コントロール」と、地域の特성에応じた「きめ細やかな土地利用コントロール」の両輪でコントロールしていく制度を検討しています。全国的に人口減少が進む中で、地域の持続性を高めるためにどのような土地利用制度が必要なのか、その一つのあり方を模索しています。



良好な農地と隣接する集落地

「歴史文化体感・発掘プログラム」in 貝塚

水野巧基：

公共マネジメントグループ



寺内町まちあるきの様子

話が逸れましたが、多種多様な歴史文化があるまちです。今回のプログラムとしては、寺内町のまちあるき、歴史文化講座、ワークショップ（大切に

貝塚市では、「文化財保存活用地域計画」の作成を進めています。

市内の歴史文化の把握にあたって、文献調査や文化財所有者アンケート等からは把握できないような「住民が大切にしたい」歴史文化やストーリーを発掘し、共有するためのプログラムを3回実施しました。

もしかすると、貝塚市＝歴史文化のイメージがない方もいると思いますので、貝塚市の歴史文化を紐解くキーワードを少しだけ並べておきます（是非調べてみてください！）。

「泉州随一の寺内町」「貝塚がないのに、貝塚市」「水間寺の参拝客を運ぶために開通した水間鉄道」「大阪最古の木造建築」「蕎原の農村景観」「三英傑ゆかりの地」「泉州の夏祭りといえば太鼓台」

たい歴史文化の掘り起こし、歴史文化を伝えるためのアイデア出し）を実施しました。

参加者は、市内で文化財の保存活用に取り組む方や文化財所有者の方も多く、新たなストーリーの発掘や面白いアイデアが盛り沢山でした。

個人的には、歴史の中でも言い伝えや諸説あるような話に心をくすぐられました（日光東照宮と貝塚市のつながり、お夏・清十郎物語が貝塚市の話だけハッピーエンドになっている理由）。

ここでは多く語れませんが、地域の歴史を共有する機会がいかに大切なかを改めて実感しました。現在、地域の歴史を詳しく知る人は、幼き頃から家族や近所の大人から地域の歴史を学んだり、学ぶ意識がなくても生活の一部に溶け込んでいました。現代では、自ら学びに向いたり高齢者が教えに向いたりしない限り、次世代に歴史が伝わらないとお話しをされていたことが印象的でした。歴史は文献で学ぶだけではなくて、その文化財や歴史と関わりがある人から学ぶことで、その想いまで受け継いでいくことができるのかなと思います。ということ、文化財や新たな歴史文化と出合える春になりますように…。

地域の人たちが中心となって、まちを盛り上げる「ニューオーノキックオフ」

山崎将也：

ソーシャル・イノベティブデザイングループ

神奈川県相模原市の相模大野駅周辺を対象に、令和3年度から地域の人たちでまちを盛り上げていくためのワークショップ（WS）が行われています。

アルパックは令和4年度からお手伝いしていますが、今年度はその集大成として「わたしたちの相模大野を、わたしたちがもっと楽しく」をコンセプトに、参加者が自らイベント企画を考へ実行するWSを行いました。

WSはA・Bグループに分かれて実施しましたが、Aグループは、空が広く眺められ、またJAXAの研究所がある地域の特徴を踏まえ、「さがみはら夢のトビラ〜宇宙編〜」と題して、JAXA職員の講話や天体観測等の企画を立ち上げました。

Bグループは、アウトドアやスポーツをテーマに「オーノまちなか運動会〜コリドー街を駆け抜ける！〜」というタイトルで、駅前の商店街をフィールドに見立てて運動会を行う企画を考えました。

WS参加者は企画内容だけでなく、地元商店街など関係者との折衝や物品購入、サポート



運動会にはマスコットも参加



望遠鏡で土星や昴等を観測

してくる人の手配など多岐にわたる検討・調整を限られた期間でまとめ上げ、11月19日に2グループのイベント「ニューオーノキックオフ」が開催されました。

2グループとも大盛況で、この日の相模大野は朝から夜まで、いつもとは違うにぎわいや笑顔が溢れていたと思います。

年齢や立場も多様な人たちがまちを盛り上げたいという思いで集まり、手探りで進め、事を成し遂げていくプロセスを見守るような業務でしたが、WS以外にも自主的に集まるなど、全ての参加者が前向きに取り組んでいく姿勢を見て、改めて襟を正される思いを感じています。

一連のWSは一旦終了となりますが、相模大野のまちづくりはキックオフしたばかりなので、引き続き携わっていききたいと考えています。

Oji Homies Meeting # 02 を開催しました

吉岡志穂：

都市再生・マネジメントグループ

アルパックが昨年度から活動を支援している「Oji Homies (オージ・ホームリーズ)」は、旧中央公民館の跡地活用を参加者の皆さんで検討するワークショップです。

「ホームリーズ」とは、地元の仲間・友達という意味を表す言葉です。昨年度は、旧中央公民館跡地の活用ニーズを把握することを目的としたワークショップ「Oji Homies Meeting #01」を開催しました。2年目となる今年度は、「Oji Homies Meeting #02」と題し、旧中央公民館跡地での活動の立ち上げを目指して、有志の参加者の方々とプロジェクトを計画していきました。

昨年11月から3回にわたり開催したワークショップを通して、テーマごとに4つのグループに分かれ、「中央公民館跡地



ワークショップの様子



ワークショップの様子

でやってみたいこと」について話し合いを進めました。一部のチームでは、跡地の整備ができるまでの準備期間として、検討したプロジェクトを町内の他の場所で行ってみる「活動トライアル」を実施しました。最終回となる第4回では、各チームで検討を重ねてきたプロジェクト構想について、地域のみなさんにお披露目し、アドバイスや協力できそうなことをディスプレイオンする活動発表会を実施しました。新たなチームメンバーも何名か加わり、来年度以降の活動に向けて新たなスタートを切ることができました。

Oji Homiesの活動はまだ始まったばかり。これからもたくさんの方の仲間たちと、活動が永く続くことを願っています。

市民ファシリテーター養成講座を開講しました

江藤慎介：

地域産業イノベーショングループ

熊本県の県北に位置し、穴場の温泉地としても知られる山鹿市で、「市民ファシリテーター養成講座」を開講しました（九州事務所の山崎・益戸と連携して取り組みました）。

自治会等の地域の集まりや、文化祭等の地域のイベントで、「皆の話が長くて時間内に終わらない」「会議の結論が出ず、何のための会議だったか分からない」、そんなお悩みを解決するため、市民の有志の方に背伸びしてもらい、「ファシリテーター」として円滑な会議運営を進めていただく講座です。

1回あたり4時間、これを毎月1回で3ヶ月開催するというハードなスケジュールでしたが、20名超の方にご参加いただき



対話型鑑賞で意見を引き出しているところ

き、11月～1月に開催しました。第1回では対話の作法を学びつつ、多様なアイズブレイクを試し、参加者が意見を出しやすい雰囲気を作るとともに、ファシリテーションに必要な心構えやテクニクを伝え、模造紙・付箋紙による一般的なワークショップを体験しました。続いて第2回では、会議（ワークショップ）の企画づくりの方法を学びつつ、あわせて対話型鑑賞をしながら「意見の引き出し方」を学んだり、アイデア発散型のワールドカフェを体験してもらう等、多様な「対話の場」を体験してもらいました。最後の第3回は、参加者自らが企画した会議（ワークショップ）について、実際にファシリテーターとして実践してもらいました。

参加者からは、特に最後の実践を経ることで「第1回・第2回の内容を深く理解した」という意見をいただきました。私たちがこれまで開催してきた数多くの会議やワークショップの運営テクニクを体系的に整理し共有でき、これからの皆さんの活躍に期待しています。

61回

2024年
2月2日

「20世紀の『すまい』を創った建築家 西山卯三の生涯を語る」

講師 京都府立大学名誉教授 広原 盛明氏

さる2月初め、アルパック大阪事務所に広原盛明氏をお招きして、今年最初の適塾路地奥サロンを開きました。氏は京都大学工学部建築計画講座・地域生活空間計画講座の教授であった西山卯三(1911～1994年)のもとで長く助手を務めておられ、研究者としての西山を最もよく知る人物といえるでしょう。

そもそも、西山先生が呼びかけ、その門下生である浅田・霜田・三輪が組織して成立した独立系都市計画コンサルタントがアルパックですから、広原氏の語るお話は会社創立当時の空気を見事に伝えるものでした。

20世紀という激動の時代、日本が発展途上にあった頃に西山先生が調査し研究した庶民の住み方の様式、

法則は現代のすまいに直結しているだけでなく、他の国や地域においても通用するものです。また高度成長期最後の一大プロジェクトだった大阪万博の会場計画では、実はアルパック創業メンバーを含む西山研が当初のコンセプトを立案していました。関西の復権を賭けて大変精力的に取り組んだ西山先生でしたが、かねてからお偉方には睨まれていた都合、財界の思惑も絡んで彼が万博の実現段階に携わることはなくなったのだそうです。

大阪万博以後の社会の転換を実体験として知っている広原氏の言葉には妙な実感がこもっており、「万博とは時代の変わり目にするものだ」という宣託にも似た響きがずっと私の頭に残っています。我々も、時代に巻き込まれることはあっても、流されないで喰らいついた西山卯三の如くあるべしと激励されたように思いました。(張玉鈴)

アルパック・パーソナル・ヒストリー・アーカイブプロジェクト リレーセッション 第1回 創業者：三輪泰司

実行委員：高瀬咲

京都事務所移転を契機に「アルパック・パーソナル・ヒストリー・アーカイブプロジェクト」が始動しました。第1回のリレーセッションの様様をお届けします。

京都事務所移転を契機に、アルパックに所属していた・所属している人達が、それぞれの時勢の中で、何を考え、どのような哲学を持ち、いかに地域や仕事に対峙してきたのか、「ひと」の歴史を「講演」・「対話」形式でアーカイブ・継承していく、「アルパック・パーソナル・ヒストリー・アーカイブプロジェクト」がスタートしました。

第1回目は創業者の三輪泰司名誉会長にお越しいただき、まちづくりに対するパーソナルな想いや考え方を軸に過去の具体的な業務や社外での活動など幅広くお話しいただきました。

多くのエピソードのなかでも、保育施設の設計を手掛けるようになった発端が印象に残りました。ある保育施設の棟が波打っているのを発見して、屋根裏に上って調べ、修繕のために市の交付金を提案、その後保育研究会で講演し、建替えの資金繰りのための制度設計まで提案して仕事を取っていったというエピソードです。起こっている事象としての課題にただ対応するのではなく、事象が起こる原因となる問題を含めて周辺の仕組みまで作る姿勢に、現在社内で一緒に働く諸先輩方に流れるアルパック・スピリッツを感じました。

50年以上前のお話も多く、今とは様々な背景や、委託者との関係等異なる部分も多いなと思いましたが、具体的な課題を発見し、関係者の考えや背景を読み解いた上で、地域や町に対する想いをもって提案してい

くという姿勢は、「できない」ではなく「こうしたらできるのではないか」「こうしたらよりよくなるのではないか」を包括して提案するアルパックのスタンスの重要な部分と感じました。

また、アルパック立上げ当初の「関西学研都市」の業務など、過去資料を読んでもスケールが大きく、概要しか把握できていなかったプロジェクトが、仕事に取り組んだ当時の生の声として経緯や背景を聴くことで、急に実感を伴って咀嚼出来たことが非常に良い経験となりました。

学生時代から建築・都市計画を学んできてアルパックに入社した私としては、教科書に載っているような出来事や今につながる制度そのものを作ってきた人とお話しできたことで、歴史そのものと対峙したような気持ちになり、会社に所属するだけでなく、大きな地域計画・建築の歴史の中に自分も位置づけられているという感覚を得ました。

この会社や歴史の積み上げの上で何を学び、今後自分が地域・社会に対して何を残していけるかということを考えていくべきと思えた大切な時間となったと感じています。



近況 & イベントのお知らせ

名古屋

これであなたも名古屋通。「〇〇散歩」やっています

名古屋事務所 福井秀樹

名古屋事務所では市内をぶらぶらと散歩するイベント「〇〇散歩」を開催しています。(〇〇はその回の担当者名) 話題の場所やお気に入りの場所など、気ままに散歩を楽しんでいます。

「〇〇散歩」はこれまで3回開催しました。最初に訪れたのは事務所のある那古野地区四間道です。超高層ビルが建ち並ぶ名古屋駅徒歩圏に、城下町時代の町並みが残っています。近年は古民家利用や古民家風の飲食店などが徐々に増え、古い町並みとおしゃれなお店のあるまちとして定着しつつあるように感じます。散歩でも蔵を改造した喫茶店を訪れました。

次に訪れたのは Park-PFI を活用してリニューアルした鶴舞公園(明治42年開園の大公園)です。花の名所であり、文化施設もあるのですが食事処がほぼあり

東京

地元住民に活用される「神田ふれあい橋」

東京事務所 佐藤依織

東京事務所から少し離れた場所にある「神田ふれあい橋」をご紹介します。

元々は新幹線の工事用として神田川に架けられたものですが、北側の佐久間町1丁目(秋葉原駅方面)と南側の須田町2丁目(神田駅方面)を結ぶ利便性の高さから地元住民の要望によって工事完了後も撤去しないこととなり、平成元年から歩道橋として供用されました。それまでは遠回りをしなければ往来できなかった両地区の住民が親しみを込めて橋の名前を「神田ふ



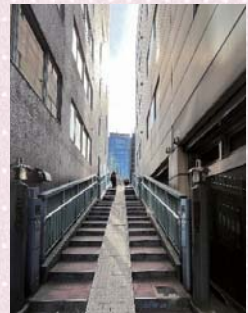
名駅超高層ビル群と四間道の蔵、神社の御神木

ませんでした。今回、すてきな飲食店を導入したことで、市民が長時間くつろげる公園になったのではないのでしょうか。隣接地では愛知県のスタートアップ支援拠点施設「STATION Ai」が建設中の注目エリアです。

3回目は初詣もかねて三種の神器の1つである草薙剣を祀る熱田神宮を訪れました。境内にある楊貴妃の墓と云われるパワースポットも参拝。熱田神宮は広幅員道路に囲まれ、それらしい門前町がありません。城下町名古屋と門前町・宿場町熱田が合併して発展した名古屋市にとって神宮周囲の賑わいづくりが課題です。さて、今回は筆者が担当。どこを訪れましょうか。



橋から見た景色



秋葉原駅側橋入口

れあい橋」と命名し、今も多くの人が利用しています。晴れた日には橋からの景色がとても良いので写真を撮りに立ち寄ってみてください。

「評伝・西山卯三」～20世紀の「すまい」を創った建築家～

杉原五郎：
相談役

「評伝・西山卯三～20世紀の「すまい」を創った建築家～」が出版された。著者は、西山研究室OBの広原盛明京都府立大学名誉教授。

西山先生は、大阪・西九条の町工場に生れ、三高・京都帝大を卒業、京都大学建築計画学講座教授(三代目)を務めた。享年83歳(1994年)で没して30年になる。西山先生は、3つの時代を生きた。第一期(1911年～1945年)では、住宅営団の技術官僚として住宅研究に取り組む。第二期(1945年～1974年)は、戦後復興期に、京大職組初代委員長、新日本建築家集団(NAU)、民主主義科学者協会など、戦後日本の復興と民主化に取り組む。高度成長期には、香里団地や千里ニュータウンの計画、万博会場計画などに係わり、日本学術会議の委員として「国土開発に関する提言」を

発表。第三期(1974年～1994年)は、大学退官後、京都の市電を守る運動、全国の伝統的町並みを守る運動など、市民まちづくり運動に参画。

西山先生は、「住み方調査」を通して「食寝分離」など住生活の型=住様式を発見し、わが国の住宅政策に貢献した。「これからのすまい」「住み方の記」「日本のすまい」をはじめ多くの著書を著した。東の丹下健三、西の西山卯三、と並び称された。

20世紀の「すまい」を創った建築家、西山卯三について、門下生の広原盛明先生は、恩師・西山卯三の足跡を辿りながら、西山先生が残した学問的業績や社会的な役割について、縦横に、切れ味鋭く、語っている。西山先生の業績に学びながら、日本のまちづくり、地域づくり、住宅政策を進めていきたい。



芳田知紀

都市再生マネジメントグループ

「めぐる季節とまちの風景」 1年の反省と展望

新入社員1年目。様々なまちづくり現場に携わり、まちの風景を作る仕事のお手伝いをしてきました。

まちづくりの現場に飛び込みこの1年で経験したことは、今後のまちづくりコンサルタントとしての道について深く考える機会を得ることができました。私が見たまちの風景たちをご紹介します。

■御所での風景

奈良県御所まちでは、未整備の空



ワークショップで利用した3Dモデルパース

ます。私は、広場の整備案を検討しました。地元の意見を取り入れながら、ビジュアル面での表現にも力を入れることができ、参加者の理解と議論を深めることができました。

■下野池団地での風景

下野池団地では団地建替事業が進んでいます。私は、事業者と地元団体との間で実務レベルの合意形成に携わりました。地域住民のライフスタイルに直接影響を及ぼすことから、慎重な事業進行が求められました。地元の見解をくみ取りながら、法律や専門知識を駆使して事業を成



総会の様子

立させる方法について深く考えることが求められると理解しました。

■大阪市の風景

大阪市では、古き良き建物に注目する「生きた建築」事業が進んでいます。戦後ビルの魅力を再定義し、その保全に向けた戦略を練る調査業務を行いました。抽象的な「魅力」という概念を定義し、実際に保全していく方法について考える機会を得ました。



調査対象となる戦後ビル

■新たなまちづくりに向けて

当然のことですが、まちづくりには様々な人が関わり合います。まちづくりを進める中で、提案や議論を進める上での準備の重要性を痛感しました。特に、提案には、根拠となるデータと、そのデータに基づく慎重な議論が必要であることを学びました。

春の訪れとともに、新たなまちづくりが始まる時期に、意気込みを新たにしています。これからも、周囲の様々な人と協力しながら、新たなまちの風景を作る為に、コンサルタントとして奮闘したいです。

表紙写真：東京文化会館の螺旋階段（撮影 坂井信行）

「レターズアルパック」は、ホームページからご覧いただけます。

アルパック (株) 地域計画建築研究所

Architects, Regional Planners & Associates, Kyoto
https://www.arpak.co.jp E-mail: info@arpak.co.jp

本社・京都事務所	〒600-8006 京都市下京区四条通柳馬場西入立売中之町99 四条SETビル2F	TEL(075)221-5132	FAX(075)256-1764
大阪事務所	〒541-0042 大阪市中央区今橋3-1-7 日本生命今橋ビル10F	TEL(06)6205-3600	FAX(06)6205-3601
名古屋事務所	〒450-0001 名古屋市中村区那古野1-47-1 名古屋国際センタービル7F	TEL(052)462-1030	FAX(052)462-1061
東京事務所	〒101-0032 東京都千代田区岩本町3-1-9 NOVEL WORK Iwamotocho 5F	TEL(03)5244-5132	FAX(03)6273-7715
九州事務所	〒810-0802 (株)よかネット：福岡市博多区中洲中島町3-8 福岡パールビル8F	TEL(092)283-2121	FAX(092)283-2128
滋賀営業所	〒527-0012 東近江市八日市本町9-14	TEL(0748)36-2065	FAX(0748)36-2168



再エネ100宣言
とRE Action



この用紙は「びわ湖の森を元気にする」
kikitoペーパーを使用しています。